



TITLE:

心理療法における「イメージと言語」の対話に関する研究－風景構成法を中心に－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

檜村, 通子

CITATION:

檜村, 通子. 心理療法における「イメージと言語」の対話に関する研究－風景構成法を中心に－. 京都大学, 2017, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2017-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20648>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	樫村 通子
論文題目	心理療法における「イメージと言語」の対話に関する研究 － 風景構成法を中心に －		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、心理療法において描画を用いた著者の豊富な臨床実践経験から、描くことそれ自体が描画イメージやクライアントの変容に与っていることに着目し、描画そのものが心理療法として機能する無意識的過程を明らかにするとともに、その過程におけるセラピストの関わりについて考察したものである。</p> <p>第一章において問題提起と本論文の目的が明確に示された後、続く第二、三章では、風景構成法創案者の中井久夫と著者が心理療法の実践において拠って立つユングの理論を下敷きに、ソシュールとバフチンがそれぞれ提唱している緒概念を援用しつつ、理論的研究及び仮説の提示がなされている。第二章では「イメージと言語」による変容の可能性について、イメージが生成される場をオリジナルの表現として「星雲のゲシュタルト性」と名づけ、そこから生まれるイメージと言語に共通の変容可能性のある特性を創造の観点から述べ、イメージと言語の身体的及び文化的側面からの議論を経て、題目にある「イメージと言語」の対話をポリフォニーのダイナミックな動きと捉え、変容の可能性について考察がなされている。</p> <p>第三章では、「イメージと言語」の対話と創造について、第二章で考察された変容の可能性が「いつ、どこで、どのように」変容へ向かうのかについて論じ、変容過程を支え促進するセラピストの関わりについて、第四章以降で検討するための仮説が提示されている。</p> <p>以上の理論的検討と仮説生成に基づいて、第四、五、六章において風景構成法を用いた事例研究が展開されている。第四章では、本研究の着想をもたらした風景構成法を描いた事例を、イメージの語りと現実が重なりながら展開するプロセスを中心に検討がなされている。描画後のクライアントとセラピストの言語によるやりとりの詳細な分析によって、風景構成法自体が心理療法として機能したこと、内的な課題が対立する2つのイメージによって表現され、それらの連辞の線状性の揺らぎが連合関係にあるポリフォニーが連辞にあらわれたものであることが示唆されている。</p> <p>第五章では前章の事例に加えて新たに一事例が提示され、ユングによる「超越機能」とイメージの変容プロセスの関連を中心に検討がなされている。前章の事例では、風景構成法作品にあらわれる超越機能の第一段階とクライアントの語りにあらわれる第二段階についてカーニバル化の観点から、新たな事例では描くことそれ自体が治療的に働いたとして、無意識下における超越機能の第二段階による自己治癒の可能性が示唆されている。</p> <p>続く第六章では、さらに詳細にポリフォニーの動きを検討するために5事例が加えられ、イメージの創造／変容に関する観点及びセラピストのかかわりの観点という2側面から、前者はポリフォニーを体験することが変容の契機となる場合及びポリフォニーの性質によって変容が生じる場合について、後者は言語的・非言語的にかかわり、連合関係の活性化と連辞と連合の間で流動化するかかわりについて、それぞれ検討がなされている。</p> <p>以上の検討を受け、第七章では風景構成法が言語による心理療法と変わらない心理療法としての使用可能性を、変容可能性を変容へと促進させたセラピストのかかわりが8項目提示され、スーパーヴィジョン機能と関連づけて論じられている。</p>			

最終の第八章では、本論文の総括として、心理療法の可能性と今後の課題についてまとめられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、心理臨床家として豊富な臨床実践体験を有する著者が、心理療法においてこれまで体験してきた「イメージと言語」の対話に関して、風景構成法を中心にその機能について論じたものである。

その構想の発端となったのは、心理療法のなかで描かれた一枚の風景構成法作品からである。描かれた作品からクライアントにさまざまなイメージが喚起され、それが言語となってセラピストに発信され、セラピストがそれに応じていくという事態が契機となって、クライアントに変容が生じ始める。このようなことは、心理療法のなかで描画を用いるときにはしばしば体験されることであるが、ではなぜそのようなことが生じるのかについては、これまでほとんど論じられてこなかった。著者は、この点に着眼し、そのときに生じているイメージと言語の相互作用を詳細に検討することを通して、風景構成法という心理療法が機能することを明らかにしようとした。ここに著者のオリジナルな臨床的発想がある。

これまでの研究がこの点を看過していたのは、クライアントが快復することを第一義とする、いわば結果を重視する傾向に加え、そこを検討するための理論的背景の弱さにあった。これに対して著者は、描画のもつ多義的であるが故の変容可能性および既成のことばからイメージが創造される過程を検討するために、バフチンとソシュールの理論を導入して、イメージと言語の対話に関する理論的仮説生成を試みている。

心理療法におけるイメージと言語の機能的連関については、これまでもソシュールらの理論から考察した研究はないわけではない。しかし著者はそれらを、イメージを重視するユングの心理療法概念と絡ませながら検討することによって斬新な仮説を提示しようと試みており、この領域における貢献として高く評価できる。著者の試みは、普遍的無意識にイメージ生成の場を想定し、その場を著者独自の「星雲のゲシュタルト性」と表現し、言語のみならず体験や身体感覚と出会うことによって分節化されるその場の様相をポリフォニーと仮定した。このような検討によって、「イメージと言語」の対話が展開されている状況を「変容の可能性」と著者は仮定する。そして、バフチンが提唱したポリフォニーの対話を可能とする「ポリフォニーのカーニバル化」の重要性を指摘し、セラピストには連合関係の活性化や、連辞と連合の間を流動化させる働きかけが重要となると仮定する。

以上の理論的仮説をもって、風景構成法を用いた事例が検討される。とくに、本論文を着想するに至った第四章においては、風景構成法作品を介してのクライアントの語りとセラピストの内的動きとかかわりがつぶさに検討されている。それは、描画と現実を往還しながら内的な課題が展開していく過程であり、そこに、連辞の線状性の揺らぎや連合関係のカーニバル化によってポリフォニーが連辞に現れることが確認されている。

このような検討を通して著者は、風景構成法についてこれまで指摘されてきたその心理療法的機能について、風景構成法それ自体が心理療法であるとする、ひとつの結論に到達している。この指摘は、心理療法の実際において心理臨床家が半ば無意識に体験していたことを理論的仮説生成によって検討することを通して明らかにしたものである。また、心理療法におけるイメージと言語の連関を理論仮説から論じたものとして貴重な貢献とすることができる。

試問では、本論文の構成と内容について議論された。それは、本論文に見られる以下の問題についてであった。すなわち、とりあげた諸理論における諸概念がそれぞれ指し示すものに関し、それらの異同についての精査がやや不足しているため、それらを総合的に取り扱おうとして、却って理論的説明において動的立体性に欠けるらしい

がある点、変容の機序が十分に論じられていない点、全体として論述がやや荒い点などであった。しかし、議論によって明らかになったのは、それら問題点が著者にとってのさらなる探究の礎石となるということであり、本論文の価値をいささかも損なうものではないということであった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 29 年 7 月 6 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降